

## 「岡村宗二・松尾誠治『幸福への農工芸融合』」ヘコメント

山崎 弘之

筆者（私）は現代経済学が生身の人間から乖離してはいませんか、という問いを何度も投げかけてきた。経済学が科学であることを否定しようとは思わない。だが、その科学性を数学に依存させ過ぎると規則性や一般性に力点が置かれてしまう。その結果現代経済学は生産（所得）の総量や増加に目的化してしまう。それらも大切ではあるが、どこか人間に寄り添う視点が外れてしまいかねないのではないか。事実、GDPは優先されるが1人当たりGDPは二の次である。ましてGDPの大きさは人間の幸福とは直接繋がらない。人間の究極目的は幸福である。さらに幸福は持続可能な社会に掲げる究極命題ではないか。

経済学は幸福を課題とする最前線に立って良いと思う。なぜなら幸福は財を作りかつ消費する機構の中で獲得されるからである。無作為の中に幸福は生まれない。労働と財を課題とする経済学に幸福という議論があつて当然ではないか。しかしこの議論がなぜか経済学に欠けていた。幸福は哲学の議論に追いやられた感が否めない。経済学が人間の科学なら、この究極目的の実現にもっと議論があつて良いではないか。経済学者の岡村と工学者の松尾はあらためてその幸福の議論に挑んでみたのである。

筆者はあるときアーティザンという職人魂に出会った。中山 章『イギリス労働貴族』<sup>(1)</sup>に遭遇したことが起因である。もちろん中山はこの著作で幸福を課題や目的にしている訳ではない。しかし、これを読んだ私にとってアリストテレス（『ニコマコス倫理学』）が採り上げた幸福の環境がアーティザンを巡る議論に当てはまることに気づいたのである。

アーティザンはartisan であり、skilled in artと形容されよう。彼らには芸（技能）がそして技術がある。労働貴族と訳される前に職人であり、彼らには技術を愛する魂が宿る。もとよりその技術は個人に培われて多種多様であるが、彼らの個性ある優れた技術に基づく製品となれば市場性を持つ。周知のように、スミスが商品においた二元性（使用価値と交換価値）が開花する。アリストテレスは述べている。「知恵は幸福をつくり出すのである。知恵は、…それが人間の全体的なアレテー（徳と卓越性）の構成部分であることのゆえに、…それに即した活動を行うところの人をして、まさしくそのことによって幸福な人たらしめるのである<sup>(2)</sup>。（一部修正訳）」アーティザンの技術は主体性ゆえに、その製品は市場性ゆえに幸福への糸口となる。

アーティザンはその幸福を育む環境をも創り上げた。それは互いに持ち合わせるリスペクタビリティに基づくものである。それは敬虔さ、自己依存、道徳的自立性をもつ「クラフト（craft）文化<sup>(3)</sup>」として特色づけられていた。しかし産業革命と共にこの「クラフト文化」は衰退する。それに歯止めをかけたのが協同組合、友愛協会、労働組合であった<sup>(4)</sup>。特に労働組合である。アリストテレスは言う。「人間はポリス的・社会的なものであり、生を他と共にすること

を本性としているからである。このことは、それゆえ幸福な人の場合にも妥当する。…彼は明らかに…親愛なるすぐれた人々と一緒に暮らした方がいいわけである。してみれば幸福な人にとっても親愛な人とは必要でなくてはならない<sup>(5)</sup>。」このアーティザン魂は数百年前のイギリスの事であるが、おおいに現代にも通じる。周知のように、日本の労働組合は企業別組合である。それに対して欧米では産業別組合、職業別組合あるいは一般組合（未熟練労働者）である。これは職能を大事にする「クラフト文化」が継承されている証左である。組合は企業を大事にするのではなく、個人の職業意志や職種を尊ぶためのものである。組合は個人の労働技術が反映されたもの、まさに「親愛なるすぐれた人々と一緒に暮らした方がいいわけ」が説かれている。ここに幸福の契機が生じている。幸福は趣味に似てあくまでも個人のものである。

もとより人間は社会的動物である。社会的動物ということは他者に依存せずには生きられない<sup>(6)</sup>。社会とは人間の自然な姿である。製品はその経済社会という無数の人々の賜物としての理解である。商品は縦横に付加価値を重ねたものである。スミスが気づいていたように、経済には秩序や調和を求める自然哲学<sup>(7)</sup>が必要であった。現代の経済学者の多くはこの自然にして偉大な機構を当たり前として畏敬の念から離れてしまった。その結果経済に加重な政策（設計）を施してきた。経済に自然と自由が宿っていることを忘れてしまっているのである。経済に自然主義を取り戻さねばならない。アーティザン魂が自然ならその所産の技術そして市場も自然である。経済学が幸福をテーマに掲げるなら、自然主義に帰らねばなるまい。幸福は人々の知恵と共同体で育まれる。換言すれば、幸福は自然主義の下で生起する。

しかしペシミズムに浸る必要はない。幸福は現代のNPOに体现されている。岡村・松尾の論説はアーティザン魂を日本の農業に見出し、それを高めようとしている。幸福の希求の原点を農におき、工と芸の後援を得て今日本に欠けている自然主義を産業全体に根付かせようというのである。

もとより農業は第一次産業で自然と闘わなくてはならない。自然との闘いは過酷であり厳しい労働を強いられる。そうであるがゆえにその厳しさに背を向け農業人口は減り続けてきた。それは不連続かつ突発的な天候に左右されるからである。さらにその中で新産物のために品種改良を余儀なくされている。農業は他の高次産業と比較してその過酷さは群を抜くかもしれない。しかしここに克服を見る。逆説的ではあるが、過酷であるが故に創造性が生まれ成功の暁に幸福が獲得される。創造性は個人の意志（あるいは意思）に基づき産物に直接反映されるからである。

アーティザン魂の功績は技術に加えて共同体の構築である。共同体（社会）は技術の客観性を育む。最も主観性をおびた技術を客観性に導く過程に幸福が生起する。換言すれば、幸福は人間の能動性の中に生起する。アーティザンの共同体は人間の意思に基づき当為のものであった。それに対して、現代の共同体は生産体制という共同体である。つまり機械がしばしばリードする。したがって労働は能動性を失い苦痛と化していきかねと問わざるを得ない。岡村と松尾は文字通り機械的労働から脱皮し得る契機を見つけようというのである。社会にHIA (human artistic intelligence) を取り戻そうというのである。

最後に期待を込めて述べておく。経済学はスミスが意識していたように道徳科学と隣り合わせ

である。道徳は社会と個人との調和（秩序）の実現に向かう規則なのである。社会はその規則を後ろ盾として人間の知恵を技術として取り上げる。そこに幸福が生起する。確認すれば、幸福は快であるが、しかしその快は個人の快ではいけない、形式という判断に諮られねばならない<sup>(8)</sup>。形式は社会、共同体や市場で醸成され、道徳が生起する。社会、共同体、市場は調和（秩序）のみならず道徳と幸福のフィルターでなければならない。いわば知恵（技術）、調和（秩序）、道徳そして幸福は相関関係におかれている。その相関のリード役が調和（秩序）そして幸福である。既述のように、自然主義はマクロの調和（秩序）とミクロの幸福とを同義にするだろう。カントはスミスが描く社会を補って美として捉え直した<sup>(9)</sup>。農業はその美を再起させる契機となろう。なぜなら農業は他の産業に比して自然と人間の融合を顕わにしているからである。そして私たちは自然から畏敬の念を授かる。当然、この核心をどのように産業全体に体现させるかが課題である。

## 注

- (1) 中山 章『イギリス労働貴族—19世紀におけるその階層形成—』、ミネルヴァ書房、1988年
- (2) *HΘIKΩN NIKOMAXEIQN APIETOTEΛOYΣ* 1144a4-7、(高田三郎訳『アリストテレス ニコマコス倫理学(上)』、岩波文庫、243頁)
- (3) 中山 章、同書、103-104頁
- (4) 中山 章、同書、148-162頁
- (5) *HΘIKΩN NIKOMAXEIQN APIETOTEΛOYΣ* 1169b17-22 (『アリストテレス ニコマコス倫理学(下)』、岩波文庫、137頁)
- (6) Hume, D., *A Treatise of Human Nature*, Analytical Index by L.A.Selby-Bigge, p.485.
- (7) Smith, A., *Essays on Philosophical Subjects*, Liberty Fund Indianapolis, this reprint has authorized by the Oxford University Press in 1980, pp.45-46, p.51. (水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』名古屋大学出版会、25-26頁、32頁)
- (8) Kant, I., *Kritik der Urteilskraft*, S.37. (篠田英雄訳『判断力批判(上)』、岩波文庫、104-305頁)、カントは述べている。「主観の認識能力〔構想力と悟性〕の調和的な遊びにおける単なる形式的合目的性の意識が即ち快そのものである。」
- (9) Kant, I., *Ibid.*, S.XLIVf, (『判断力批判(上)』、54頁)、道徳的意識が高かったカントは経済機構を直接課題とすることはなかった。しかしスミスやヒュームを意識していたことは明らかである。カントの第三批判『判断力批判』はヒュームのみならずスミスへの補完的理論に見える。これについては、知念英行『カントの社会哲学—共通感覚論を中心として—』、未来社、1988年、111-115頁、122-124頁を見よ。浜田義文『若きカントの思想形成』勁草書房、1967年、71頁を見よ。